

高山・市民の森 森林教室実施報告書

「森の散策と草木染め」

令和5年7月13日

1. 実施日時 令和5年7月9（日）10：00～14：00
2. 参加講師名 NPO 森林インストラクターしずおか
担当会員： 越智、高橋
アシスト会員： 青野、大石、小久保、小長井、杉山、望月、矢下
3. 一般参加者 19人（大人10人、子ども9人）

4. 概要

朝から雨模様の天気だったためか、60代から80代の応募者4人のキャンセルがでた。また、水見色からの道が崩落で通行止めとなり新聞から入るしかなかったが、不慣れな道で到着が遅れた参加者グループも出た。このため散策のスタートがかなり遅れ、時間的に十分な観察ができなかったきらいがあった。散策の途中で雨には遭ったものの、小降りです歩くのには支障はなかった。午後からの草木染体験では、タマネギの皮、アカネ、センダングサ、クサギの実、クチナシの実などを使って染色した。参加者思い思いに模様をつけた上で好みの色に染め、そのやさしい風合いに満足してもらえた。

5. 森の散策詳細

杉山・大石班

両親と2女1男の5人家族を担当。高山市民の森には何度か来られ、森林教室にも参加経験のある家族であった。まずは、ミズメから。「何のにおいかな？」と問うと「湿布の匂いがする。」子ども達も頷く。次にクリとクヌギの葉を比較し違いを説明する。クリの雌花を見てもらい、まだ柔らかいが毬に包まれている姿が可愛く、これがあのおいしい栗になることを知ってもらう。キハダでは黄色の内皮を見てもらい、同時に苦い味を体験してもらった。漢方の黄柏として胃薬に使われていることを話す。続いてマタタビの果実と虫こぶを見てもらう。大人は、果実より虫こぶを喜ぶわけを話す。今日は草木染がテーマなので、ウワミズザクラの樹皮が草木染に使われることやヒサカキやツバキの木灰が草木染の媒染剤に使われることなどを説明した。

遊びの森にあるナツツバキに花が数輪残っていた。ナツツバキ（夏椿）が娘さんの名前と一緒になので（読みは「なつき」で違いますが）記念写真をパチリ！嬉しい気持ちになる。サンショウの葉を手にとってパチンと叩き、香りを楽しみ「さて何の匂い？もうすぐ土用の丑の日だね。」「うなぎだー・・・」。まだまだ子供たちは元気だ。高山の池から中間展望台を目指す。展望台で景色を楽しみ、大声で「ヤッホー!!」今日はよく反響する。子ども達は面白くなって「ヤッホー!!」を繰り返す。「来たよ、来たよ。」とご両親。楽しいひと時であった。池のハンゲショウを覗いてみる。半分、化粧している？半夏生の頃に咲く？そんな名前の謂れなど説明しながら見てみたが、ネットの向こうに咲く花がよく見えないのが残念だった。「お腹すいたー！」と子ども達、「さあ、お昼ごはんを食べに戻ろー！」頑張って坂道を上る。

小久保・矢下班

シニア世代の女性2人と、前回も参加してくれたYさん親子（お父さんと小学校高学年の男児）、計4人の班をガイドした。今回はスタートが遅くなったのと、時折雨も降るような天気だったので、歩

き回るより樹木の観察に時間を使うようにした。お二人の女性に加え、今回のYさんは父子2人とも植物を深く知ることにとりわけ熱心で、皆さん樹木の解説に関心を示してくれた。例えば、サクラの葉には蜜腺があって見分けのポイントとなること、クヌギとクリの葉は互いによく似ているが鋸歯の形が少し異なること、タラノキはあの巨大な2回複葉が一枚の葉であること、などを詳しく説明すると誰もが興味深そうに聞いてくれた。

マテバシイの実を説明する時には、こんな話もしてみた。「去年の実を探すため地表の落ち葉をかき分けたら実は発見できず、代わりに大きなミミズが出て来た。ところが、それを見た女性は苦手だと言って少し引いてしまった。そこで、土壤の大方はミミズの糞で出来ている事、全ての生き物がこの動物の恩恵を受けている事、何れは食料にもなるかも？等とミミズの役割をPRした。」そんな例を挙げながら、地面の下にも面白いものが沢山あるので興味をもって下さいとお願いした。

ミズメの枝での香り、キハダの樹皮の味覚などの体験では、皆それぞれに驚きまた楽しんでくれたようだ。また珍しくこの時期に白い花が目立つリョウブでは、「この木は食べられる木です」という説明に、皆興味津々。新芽の図を示しながら「私は毎年この芽を天ぷらで楽しんでいます。リョウブは陽当たりの良いところならどこにでも生えるので、採り放題です。」名前の由来とともにこんな説明をすると、皆さんの目が輝いた。マタタビに実がなっていたので見てもらおうと、それを手に取って如何にも味見したそうだった。慌てて「青い実はメチャクチャ辛いので、口に入れてはいけません。味見するならマタタビ酒にして味わって下さい。薬効もあります。」と説明。同時に虫コブも採取し、その断面を写真に撮って拡大して見てもらった。画面に幼虫の頭のようなものが現れ、皆さんそれを興味深そうに覗き込んだ。

そんなわけで、最初の「森の恵」周辺の樹木観察だけでもかなりの時間を費やしてしまった。散策で中間展望台までは行こうと思っていたが、結局高山の池を回っただけで戻ってきた。それでもYさん親子は、歩きながら「落ち葉が黄色いのは何故？」と嬉しい質問。葉緑素の分解による窒素回収や離層の形成など、紅葉の仕組みに絡めて簡単に解説すると、とても興味深そうだった。「また次回会えたら、もっと詳しく説明しますね。」と話す、と「勿論、また次回も応募します。でも、抽選がねえ...」と言う。前回も今回もキャンセルする人が相次いだのに、本当に参加したい人が抽選で外れてしまうとすれば如何にも残念、という口ぶりだった。何とか、こういう参加者の熱意に応えられようとしてゆきたいものだ。

青野・小長井班

両親（40代）と5才男児（初参加）、母親（40代）と7才、3才男児の2家族計6名を案内した。駐車場の先から高山の池に降りて、右回りに駐車場に戻る周回コースとした。男児3名は、植物には興味を示さなかったが、昆虫を中心とした小動物には興味があるようだった。バッタの幼虫等、ザトウムシまで含め、動くものは全て捕まえようとしていた。その結果、散策は、男児3名の小動物探しが中心になった。そんな中、父親が桜の切株の一部をひっくり返した時に、コクワガタのメスを発見した。男児は喜ぶのかと思ったが、それほどでもなかった。クワガタやカブトムシに興味を持つには、まだ年齢的に早かったのかもしれない。

植物については、五感で体験してもらえるものとして、コクサギの葉、クロモジの枝、ミズメの枝の匂いを嗅いでもらったり、ヤブムラサキの葉のふわふわした感触を確認してもらった。初体験で、よい刺激になったのではないかと思われる。その際、匂いや葉の毛は、病原菌の侵入や食害を防ぐためのものであることを説明した。その他、スギとヒノキの枝葉を比較して、違いを確認してもらったりした。

森の恵に戻ってきた時点で時間に余裕があったため、母親2名に、ミズメとマテバシイの葉を触って違いを確認してもらい、落葉樹と常緑樹の生態の違いを説明した。理解していただけたのではないかと思われる。また、地球温暖化について、温暖化の背景と森林には温暖化を緩和する機能があること、そのためには、伐採と植栽を繰り返して行く必要があることなどを説明した。どこまで理解していただけたかは不明だが、関心はあるようだった。

高橋班

母親と10歳の男の子、8歳の女の子、70歳代の女性の4人の参加者、「高山市民の森」は初めてだそう。この組は途中道に迷って、大幅に遅れて着いたため、散策の時間は僅かとなり、高山の池から中間展望台まで行って戻った。植物では、マタタビの実、ミヤマシキミの実、ミズバショウ、コアジサイなど、生き物では、モリアオガエルの卵塊の残渣、アリジゴクなどに興味を示した。草木染もふくめ楽しかったという感想をもらった。

(報告まとめ 高橋)

【散策の様子】





【草木染めの様子】

